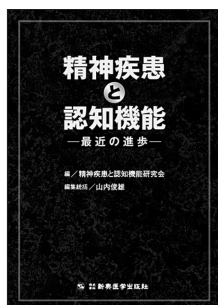


■ 書 評



精神疾患と認知機能 一最近の進歩一

精神疾患と認知機能研究会
編, 山内俊雄 編集統括
新興医学出版社
2011年11月
130頁, 定価 5,250円

“Cognition”（認知）という言葉は英語の“Know”（知る）や“Can”（できる）と同じ語源から派生するということであるが、認知機能障害という言葉には何かを知ったり、行ったりする機能の不具合というニュアンスを含んでいることを表している。主要な精神疾患が生活機能や社会機能の障害を含むため、「認知」という側面で捉えることが疾患概念の理解のみならず病態把握に繋がると考えることで認知機能への注目度が高まっている現状が理解できるようにも思える。

ここに書評として取り上げる書籍「精神疾患と認知機能一最近の進歩一」については、「精神疾患と認知機能研究会」の2007年以降の成果をまとめたモノグラフということであるが、2001年より2007年までの研究会での成果をまとめた「精神疾患と認知機能」の続編としての刊行となった。前書は全体で341頁であったのに比べ、本書は130頁とコンパクトになった。その章立てもシンプルで第1章 統合失調症と認知機能、第2章 感情障害と認知機能、第3章 治療によって認知機能は改善するか、となっている。前書の書評が本誌113巻1月号に掲載されているが、その中で『(前書の)最後の第5章は「認知症機能とその改善」とされ、薬物療法や認知機能リハビリテーションなどが紹介されている。あえていえば、この部分はまだ手探りの状況のようにみられる。まだ探検されていない地図の空白部といっは言

い過ぎであろうか』と書かれており、今後の認知機能障害の研究として認知機能の改善という方向性があることを示唆していた。本書では図らずも薬物療法や認知機能リハビリテーションに半分以上の頁を割いており、2冊で相互に補完する形となっている。

本書は複数の専門家による分担執筆であり、当該分野の研究のレビューとともに著者の研究内容に沿った最新の知見を紹介する形となっている。評者が本書を一見して感じた印象として、図が増えている点や全体のレイアウトを揃えるなど読みやすさのための配慮がなされていることがあった。実際に用いられた図表の数を比較してみたところ、前書では115の図（カラーは21）、表は33であったのが、本書では65の図（カラーは15）、表は10となっており、特に図（カラー）の割合が大きくなっていった。また本書でのわかりやすさの工夫の表れとして、第1章 統合失調症と認知機能、第2章 感情障害と認知機能について各々の最後のパラグラフは編集担当者が「まとめ」として研究内容の説明や論文の意味付けを読者にわかりやすく示したことが挙げられる。ここであえて付言すれば、第3章についてもそのような「まとめ」があると書籍としての全体的な統一性が出てくるのではと思われた。今後の「精神疾患と認知症研究会」の発展とともに本書の続編も予想されるのであるが、願わくは前書でも取り上げられた不安障害や発達障害、その他の精神疾患についての認知機能についてのさらなる知見を加えられることが望まれるように感じた。さらには認知機能障害の将来的な研究として、より先端的で学際的な志向性を持った内容が加わることで、例えば神経認知科学に関する基礎的な研究や分子遺伝的な研究を踏まえたアプローチなど様々な発展性が考えられた。本書に触発された研究者によって認知機能に関する研究が今後も継続的に進展することを期待したい。

(谷井久志)